

吉備国際大学研究紀要
 (社会福祉学部)
 第20号, 77-86, 2010

岡崎師範学校・愛知(県)第二師範学校における学生の帰属意識

田中 卓也

The Formation of a Sense of Belonging in Students of OKAZAKI Normal School and The second Normal School in AICHI prefecture.

Takuya TANAKA

Abstract

This Paper is aim to Clearly the formation of ideas of Students Nomal school of OKAZAKI and The second Normal School in AICHI prefecture. Normal schools Students were made many school friends and dormitory roommates. They lived under the same roof with them for a few years (months). They sang the praise of youth with fellow workers through their school lives.They had been companions (pals) since then. But at Wolrd War II, it took a heavy toll in human lives.They were one of as the war many victims. There was a sense of solidarity among them.and there was a close bond of affection in friendship between them. The idea of "AOI" is a symbol of school song,They were their emotional stay as MIKAWA DANJI. it hatred for them in his heart.

Key words : OKAZAKI Normal School, The second Normal School and The second Normal school in AICHI prefecture, MIKAWA DANJI, Air-raid in OKAZAKI, Student mobilization, AICHI Teacher training college

キーワード : 岡崎師範学校、愛知(県)第二師範学校、三河男児、岡崎空襲、学徒動員、愛知教育大学

【はじめに】

本研究は、1899(明治32)年に創設された「愛知県第二師範学校」を前身校とする「岡崎師範学校」(現在の国立大学法人愛知教育大学の前身校)および1943(昭和18)年になって改称されることになった「愛知第二師範学校」(同上)時代における学生の実態に迫ろうとするものである。また男子学生における学校への帰属性および気風がいかなるものであったのかについても明らかにしたい。

これまでに「師範学校」に関する教育制度・実態の分析については、三好信浩『日本師範教育史の構造 地域実態史からの分析』(東洋館出版社、1991年)や逸見勝亮『師範学校制度史研究-十五年戦争下の教師教育-』(北海道大学図書出版会、1991年)、山田昇『戦後日本教員養成史研究』(風間書房、1992年)、船寄俊雄『近代日本中等教員養成論争史』(学文社、1998年)等による一連の研究蓄積が存在する。

また「岡崎師範学校」ならびに「愛知県第二師範

学校」に関する先行研究には、おもに教育制度やその実態を明らかにしたものとしては竜城会編『竜城会六十年誌』(1968年)、愛知教育大学史編さん専門委員会編『愛知教育大学史』(1975年)、愛知教育大学同窓会三河地区会・竜城会編『母校の歴史と同窓会百年－三河教育の潮流－』(2001年)等の多くの蓄積が見られる。とりわけ師範学校在籍の女子学生らは、在学中において学生同士の絆を深めていくことがあった¹⁾。寄宿舎での集団生活を通して、若い彼女らはまさしく多情多感な青春期をともに過ごしていくことになった²⁾。

一方男子の師範学生においても、集団生活を通して師範学校を心の拠り所としていたことも否定できない。岡崎師範学校の後継校となる「愛知第二師範学校」の師範予科の学生(昭和二十年予科入学生の会)らが中心になってつくられた手記集(記録集)『激動時代の学生生活を語る』(非売品、2000年)なるものが存在する。同書は元予科学生延べ91名の手記から成る記録集である。このことについて元学生の中西光夫は「皆さん方の激動の学生時代を語る感動の青春記と申せましょう」と言及している³⁾。さらに中西は「八カ年の間には、旧制師範学校卒で教育界に身を投じられた方、学芸大学前期終了で学業を終えられた方、大学後期まで進み第一回の卒業生となられた方・・・など、実に多彩な経歴を歩まれたのです。それぞれ卒業の形態は異なっても、同期生としての固い連帯意識のもと、あつい友情を交されて、今回、揃って古稀を迎えられたお姿にも心打たれ」と述べるように、何かしらの男子学生のなかの共同体のようなものがそこには存在し、また彼等の母校に対する帰属意識があったものと考えてもよいのではないだろうか⁴⁾。なお岡崎師範学校時代の手記集については、単独のものとしては管見の限り見当たらない。しかしながら前述した『愛知教育大学史』、愛知教育大学名古屋分校回顧録編纂委員会編『愛知教育大学名古屋分校回顧録』(1970年)

等には、僅少ではあるが数名の手記が残されているのみである。いずれにせよ、師範学校の学生の実態に迫る手法として、このような手記集を用いることにより当時の男子学生の心性・真情にふれることは、これまでの先達による研究には見られない。本発表では、これまで進められることがなかった岡崎師範学校・愛知県第二師範学校の男子学生の帰属意識の形成過程を考察し、帰属意識の特質をみいだしたいと考える。

【1】岡崎師範学校の設立と学生の実態

①創設の経緯

岡崎師範学校の設立は、先述の「愛知県第二師範学校」(1899年)の設置に端を発する。わが国では、明治20年代から30年代にかけて、小学校の教育制度が整備されることになった。これに伴い小学校への就学率も上昇し、児童の就学水準も向上することになった。この状況下で1897(明治30)年10月に「師範教育令」が公布され、それまでの「尋常師範学校」は「師範学校」と改称された。また各府県1校の設置と限定されていたものの、1校もしくは数校設置できるまでになった。同年12月になると、男女別学が望ましいという訓令が出され、女子師範学校がその後独立していくことになった。また当時の県民からも師範学校の増設についての要望もあった。建議書には「熟々本県下教育ノ実況ヲ観察スルニ普通教育ニ於テ師範学校中学校ノ増設ハ最モ其急ニ迫レル(中略)粗飯学校ヲ拡張シテ小学校教員ノ需用ヲ充タシ中学校ヲ増設シテ中等教育ノ普及ヲ謀ルハ県下教育上刻下ノ急務タルハ論ヲ俟タサル処ナリ(中略)第二師範学校ヲ三河ノ中部ニ」と記載があるように、すでに三河中部すなわち岡崎近辺への設置案が出されていたことがわかる⁵⁾。

その後県は上申書を文部省に提出し、1899(明治32)年3月7日に愛知第二師範学校の設立の運びとなった。また第二師範の設置に伴い、それまでの愛

知県師範学校は「愛知県第一師範学校」となった。

1907(明治40)年には「師範学校規程」が出され、愛知県第一師範・第二師範にはそれぞれ「本科第一部」・「本科第二部」および予備科(1911年廃止)が設置された。前者は上級資格の取得を目指すものであり、後者は教員の速成養成を目指すものであった。この頃の入学生の父兄の職業(1904年)について見てみると、第二師範学校では入学者40名のうち、「農業」が35名と大半を占めており、「教員」が2、「工業」・「商業」がともに1で、「その他」が2となっていた。農業のさかんであった三河地方の土地柄と関係があるのかもしれない。

大正期になると、それまでの師範学校規程が改正され「本科第一部の修業年限を5年、入学資格は修業年限2年の高等小学校卒業もしくは年齢14歳以上でそれと同等以上の学力のある者」と定められるようになった⁶⁾。

愛知県では1923(大正12)年3月に「師範学校学則」を改正した。そして同年4月よりそれまでの第二師範学校を「岡崎師範学校」と改称することになった。改称の年は、師範学校創設25周年の節目の年にあたった。以後岡崎師範学校においても学生数を増加させ、多くの小学校教員を輩出することになった。

②厳格な寄宿舎生活

師範学校では全寮制であり、寮は寄宿学生にとっての共同生活の場となった。僅かな資料であるが、明治期の寄宿舎の様子を在学生の日記より見てみたい⁷⁾。

六供町の本校および寄宿舎

明治41年、初めて中等学校卒業を入学資格とする第二部生が募集された。六供の本校寄宿舎で、第一部と第二部生との衝突が起り、第二部生と交代して、我々は本校の寄宿舎に移されることになった。本校および寄宿舎は上下動の硝子窓

を有する質素なしかも頑丈な建物で、当時の兵舎造りと同じであり、太さ3・4寸の木材の柵で周囲をめぐらしていた(中略)起床も人員検査も、食事も授業も自習も、就寝消灯も総てラッパの合図に随って行動した。全寮制度で入学を許可せられた者は、たとえ岡崎の者でも通学を許されなかった

「第一部と第二部生との衝突が起り、第二部生と交代して、我々は本校の寄宿舎に移されることになった」とあるように喧嘩が絶えなかったのであろうか。寮の建物は「当時の兵舎造りと同じであり、太さ3・4寸の木材の柵で周囲をめぐらして」いることから、寄宿学生は「籠の鳥」のような状況であったのかもしれない。

また1921(大正10)年10月に同校を卒業した水野鈴一は、当時の寄宿舎生活について次のように述べている⁸⁾。

第一に寄宿舎生活のことです。もちろん全寮制度でありその生活はミニ旧陸軍内務班と想像していただければよいと思います。実に階級制度のきびしい世界でありました。新入生は1年乙と称し半年経過すると1年甲となり、以下2年乙、2年甲、3年乙、3年甲、4年乙、4年甲となって卒業という段取りですが、特に1年乙の期間中は実質的には仮入学生であり、不適格者はいつでも退学処分になるとおどされていたことを思い浮かべます。そして2年乙以上の上級生には顔をあげて物はいってならぬというご託宣を受けていたことを思い浮かべます。それから私達は10月の入学なので一番寒い時期を最下級生として過ごさねばならなかったのであります。就寝前のストーブの掃除、起床前の室内の掃除整頓に追い使われ、手は霜焼けやあか切れてふくれ上がり、禪寺の小僧修行にさもにた

りでありました。又最上級生らに対する下僕の奉仕の数々があります

厳格な寄宿舎生活のなかでも、彼らは僅かな楽しみを求めることがあった。時代は下るが、1937(昭和12)年に岡崎師範学校本科第一部(第41回)を卒業した富田太は次のように当時を語っている⁹⁾。

5ヵ年の生活には思い出は多い(中略)寮における1年生の多忙さと緊張の一日、星雲寮の売店、夜警当番のくじ、外出時の脱帽敬礼、持ち物検査のおごそかさ、就寝起床の点呼と上級生の要領のよさ、教育実習、運動部の苦楽、運動部優勝の報と夜の殿橋までの出迎え、校歌は夜の康生、連尺、六供の町々にこだまする若人の感激、夜桜見物のだんらん、遠足、東三旅行、修学旅行の楽しさ(中略)ひるがえって、規則への抵抗として人気のあった舎監を困らせた伝統的な話や脱線行為、岩津の山奥で催された卒業生送別の記念コンパ等……きびしい制度の中で精一ぱいに抵抗した若者の生き方の歴史がなつかしい

宮田は「校歌は夜の康生、連尺、六供の町々にこだまする若人の感激、夜桜見物のだんらん、遠足、東三旅行、修学旅行の楽しさ」と厳しかった生活のなかにも楽しい思い出にひたっている様子であろうか。しかし彼は「ひるがえって、規則への抵抗として人気のあった舎監を困らせた伝統的な話や脱線行為、岩津の山奥で催された卒業生送別の記念コンパ等……きびしい制度の中で精一ぱいに抵抗した若者の生き方の歴史がなつかしい」と言っているように、束縛からなかなか解放できないやるせない気持ちを寮生活のなかで、「抵抗」というかたちで、思いっきり大人におつけていたのであろう。さらに、戦時色が色濃くなってきた1942(昭和17)年

3月に本科第一部(第46回)を卒業した中西光夫は、次のように当時を振り返っている¹⁰⁾。

わたしたちは、日華事変のはじまった昭和12年に本科一部に入学し、太平洋戦争開戦の年に最高学年を過した。まさに戦いと共に入学し、戦いのさ中に卒業した世代であり、短期現役制度のなくなったときであり、卒業後1年の教職期間を経て、全員がアジア大陸と太平洋各地のはげしい戦場に赴いた。そして戦い終わって復員したときには、40名のクラスの内23名が戦死していたのである。まことに痛恨やる方なき思いであった(中略)

<竜城文学会>

春季寮・夏季寮など、はげしい運動部の合宿練習とならんで戦時中とはいえ、寄宿舎の中には文化的なサークル活動があった。その一つ、「竜城文学会」が生まれたのは、昭和15年の秋である。顧問に、喜多義男先生をいただき、同人約40名、14歳から18歳までの、青春多感な若者たちのつどいであった。会の最初の活動は輪読会だった。喜多先生がドイツ語で「ニーベルングンの歌」を朗読されたが、ドイツ詩の持つ美しい韻のひびきは、同人の心を魅了してしまった。続いて「ユーカラ」漱石の「こころ」と、はいつていった。11月下旬になり、会の中心となって働いていた渡辺黄一・山本彰一・深谷修・田中定雄・山田格太郎らの間で、同人雑誌『葵』の発行計画が持ち上がった。創刊号はわら半紙10枚のささやかなものであったが、同人の喜びは大きかった。発行年月日は昭和15年12月25日。巻頭言は渡辺黄一が書いている。『…新しい世代の命題が真向から挑みかかる。現実には展開しつつあります。いま□かざりせば、憾は死すとも攘はれないのです。新文化の要望はひしひしと迫る! 光栄と責任の溢るる時、竜城

文学会は、文学に対する無辺の愛情によって融け合った力で、さらに大なる文化的使命に向かって邁進するのです。このときささやかなりとも、若日の如き力強い第一歩でした。“葵”の厳たる事実一瞥いような尊さではありませんか。共同の前身のために、聖なる労作“葵”に顕現して考究し具体化していきたい……』(中略) 戦争が激しくなったため、第3号以降は発行されずに終わったが、今にして思えば、若い魂の貴重な燃焼であったといえよう

「春季寮・夏季寮など、はげしい運動部の合宿練習とならんで戦時中とはいえ、寄宿舎の中には文化的なサークル活動」であった「竜城文学会」は「同人約40名、14歳から18歳までの、青春多感な若者たちのつどいであった」ようである。貴重である5年間の寮生活での青春を文学にぶつけたのであろうか。そして文学青年をめざしたのであろうか。またサークルから「同人雑誌『葵』」の発行するまでにいたったことは、なんともいえない喜びであった。

「葵」は岡崎師範学校・愛知第二師範学校校歌の1番の歌詞の冒頭にもある言葉である。「葵の花の咲きそめて……」きっと誰もが口ずさんだことのあるフレーズであったにちがいない。そんな思いを込めてタイトルにしたのであろうか。師範学校の文学青年らは、同人誌『葵』をシンボル化のように見立てていた。

③三河男児（健児）と師範学生

昭和期における岡崎師範学校・愛知県第二師範学校の行事のなかに「三河男児の歌」の「詩吟引き継ぎ」というものがあった。これは卒業生の送別会の際に行われるものであり、作詞者は志賀重昂であり、明治～昭和戦前期を通じて同校の学生が愛唱したものであった¹¹⁾。最高学年の朗詠の優れた学生から、在学生の代表者に詩吟が引き継がれた。開催場所は寄

宿舎となっていた。「汝見ずや 段戸の山は五千尺」「又見ずや 矢作の水は三十里」「三河男児 請う往け」「三河男児 須く奮起すべし」というように2人の代表者により、詩吟を奏でた。なお志賀は1934（昭和9）年9月3日に同校文芸部主催の講演会にも招かれ、「南米事情」についても講話を行っている。学生の修養向上に努めたのかもしれない。

岡崎師範学校・愛知県第二師範学校の学生は、厳格な寄宿舎生活を余儀なくされた。自由時間が僅かしか存在しなかった彼らは、夜桜見物や遠足、修学旅行等を存分に楽しみ、部活動・文学サークルの結成や同人誌『葵』の発行などに精力を傾け、ぶつけるところのなかった青春・若さを思い切りぶつけようとした。

【2】戦時下の岡崎師範学校

①社会主義思想運動と学生

1929（昭和4）年7月18日、岡崎師範学校を大きく揺るがす出来事が起こった。それは、同校学生が防空演習を挙行しているさなか、「国家総動員反対」のビラを貼付・配布したことにより、特別高等警察により検挙された事件である。「内務省警保局」が作成した『社会運動の状況1』（昭和2年～4年）によると、その経緯と結果について以下のように記されていた¹²⁾。

二、愛知県岡崎師範学校社会科学研究会(中略)

(1) 組織経過

岡崎師範学校生徒中洋画研究ニ趣味ヲ持ツモノノ相寄リテ昭和二年四月頃ヨリ思想要注意人近藤孝太郎、和田英一、小学校教員等ヲ加ヘタル洋画研究新光会ヲ組織シタルカ、近藤、和田ノ兩名ハ機会アル毎ニ階級意識ノ注入ニ努力シツツアリタルカ、生徒中ニ於テモ専攻科生畔柳治三雄ハ既ニ二、三年前ヨリ思想的書物ヲ耽読シ相当階級意識ヲ抱持シ居ルモノ

アリタル為洋画研究ハ漸次社会科学研究ト転化シ来リ、昭和四年五月中旬より前号畔柳ノ他本科五年生安藤春雄同三年生神谷光次、同四年生兼子忠治、井藤十一、鈴木清外二三名ヲ加ヘテ社会科学研究会ヲ組織スルニ到リ、毎日曜日適宜ノ場所ヲ選定シ『無産者政治教室』『賃労働ト資本』等ヲテキストト為シ社会科学ノ研究ヲ組織的ニ開始シタリ（中略）

(3) 事件ノ措置

右事件発生ト共ニ警察当局ニ於テ捜査ノ結果前記ノ如ク岡崎師範学校生徒ノ所為ト判明シタルヲ以テ直チニ学校当局ト協議シ将来ヲ考慮シテ単ニ学校側ノ処分ノミニ委ネ司法処分ニ附セサルコト、為シタルカ学校当局ニ於テハ同月三十一日左ノ如ク処分ヲ為シタリ

退学 畔柳治三雄 安藤春雄 伊藤十一 兼子忠治

無期停学 鈴木清 神谷光次

この反戦ビラ事件については、後に大きな反響を呼ぶこととなった。当時の愛知県知事であった岡正雄はこれを受け「我が国体ノ精華ヲ発揚シ、国運ノ隆昌ヲ計リ、国民精神ヲ作興スルハ我が国家文教ノ根幹タリ」とする訓示を県下公私立学校長に対し発令した¹³⁾。いわゆる思想善導の方策を採った。赤化運動として大々的に報道された沖縄師範学校・長野師範学校と岡崎師範学校であった。なお退学処分を受けた学生については、教育界には復帰することはなかった。なかでも安藤春雄は同期の昭和5年卒業の学生と交流は続いた。同窓会「昭5会」会長を務めた小嶋勉はのちに「今から思えば軍国主義化する時代を見通し反戦運動を起こしたり、ラジオやテレビなどによる情報伝達が一般社会に及ぼす重要性をいち早く感知して、民間放送事業に参画し、尽力された安藤春雄君は私達、同級生の中でいつも一歩先を見極め、一歩先を進んだかけがえのない偉大な人

物であった。彼は卒業こそしなかったが私達同級生としての交友と友情には格別のものがあつた」と述べているように、同窓のつながり（絆）を感じさせる一節である¹⁴⁾。

②戦時体制の激化と岡崎師範学校の終焉

1931（昭和6）年より、わが国は十五年戦争に突入していくことになる。また大正デモクラシー以来続いてきた民主政治が終焉を迎え、新たに軍部が政治権力を掌握していくことになった。以後軍国主義が進行していくことになった。軍国主義の影響は教育界をも席捲した。1941（昭和16）年に「師範学校制度改善要綱」が決められた。師範学校は1県1校とする方策が確定した。東京・大阪・北海道は特例で2校認められるものの、愛知・新潟・静岡・福岡の4県に至っては、1校に縮小することが取り決められた。これに伴い岡崎師範学校の危機が危ぶまれるようになった。1943（昭和18）年3月になると「師範教育令」が改正され、中等教育・高等教育の戦時体制化が図られることとなった。これにより全国の師範学校をすべて官立化し、修業年限3年の専門学校程度の学校に昇格させることとなった。またそれまでの本科第一部・第二部の廃止、男女別に置かれていた師範学校を男子部・女子部としてまとめられた。

かくして同年4月1日、官立移管と昇格となった岡崎師範学校は「愛知第二師範学校」と改称することになった。当時入学を果たした佐藤敬治（1948年卒）は、次のように当時を回顧している¹⁵⁾。

寄宿舎から廊下つづきの『本校』へ出向いて授業を受けていたようだが、バイエルに困り果てたことのほかにとんと覚えていない。・・・14・5歳の少年ではあつたが、われわれを街の人たちは『生徒さん』と呼んでくれていた。思えば師範学校には、それだけ重厚な伝統がひきつがれていたであろう。帽章は、大きな金色

の『師』の一字。国家動乱の時代に、少年たちがこの徽章を頭に輝かしていたとは、何とすばらしいことか

「思えば師範学校には、それだけ重厚な伝統がひきつがれていたのであろう。帽章は、大きな金色の『師』の一字。国家動乱の時代に、少年たちがこの徽章を頭に輝かしていたとは、何とすばらしいことか」と話す佐藤には、戦時下でありながらも師範学生としての重みを肌で感じ、誇りを持って生きていくとする姿がうかがえよう。また佐藤と同期入学の児玉忠雄は、当時の寮の様子について、次のように述べている¹⁶⁾

戦時下の寮生活

寮の日課は、1年生にはかなり厳しいものだった。なかでも起床から朝礼までは短時間のうちに敏速で正確な行動を要求され、習慣づけられたものである。起床とともに素早く寝具の整頓（上級生のも揃える）歯磨き、洗面をし南庭へ集合、点呼、国旗掲揚、体操、乾布摩擦、寮歌斉唱、連絡伝達の行事があり、非常時下の訓練が続けられたのである。また、上下関係がはっきりしていて上級生の命令には絶対服従であり、部屋の整頓はもちろん、掃除、水汲み、雑巾掛け、本箱整理、靴磨きなど、すべて1年生の仕事だった

「起床とともに素早く寝具の整頓（上級生のも揃える）歯磨き、洗面をし南庭へ集合、点呼、国旗掲揚、体操、乾布摩擦、寮歌斉唱、連絡伝達の行事があり、非常時下の訓練が続けられたのである」児玉の言葉には、すでに師範学生としての思いや感情などは込められていない。それだけに戦時体制がますます激化していたことを裏付けるものとなっていた。師範学校では、1944（昭和19）年3月に出された「決

戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」が閣議決定されたことで、学徒動員体制が確立した。これにより師範学生等においても免れることなく適用されることになった。学生らは軍需生産の労働力として各地の工場に動員された、師範学校はまさに教育活動停止の状況となった。

【3】師範予科学生の登場

①岡崎空襲による悲劇

戦火はますます激化の一途をだとしていく。1944（昭和19）年から始まった米軍爆撃機B29による本土空襲は、翌年になってから本格化した。これにより大都市を焼き尽くし、地方の都市へと攻撃目標を変更することになった。愛知第二師範学校のあった岡崎の地もその例外ではなかった。1945（昭和20）年7月20日午前0時ごろから2時にかけて、126機のB29が岡崎市内一帯を攻撃することとなった。これにより約3万人以上の罹災者を出すという悲劇が起こった。また愛知第二師範学校の校舎も焼失し、食堂・武道場の一部を残すのみと化した。男子部校舎は大部分焼失するという大惨事となった。この出来事を動員先の大日本兵器株式会社幸田工場で知らせを受けた平林芳己（昭和20年卒）は、次のように述べている¹⁷⁾。

9月に入って学校より連絡があり、登校した。久しぶりに昇る竜城が丘の坂道、その木蔭に見えるはずの学び舎はそこにはなかった。“母校焼失”この現実を目の当たりにして、暗然として一瞬、声を失った。教師への道を志し、日夜勉強に励んで、漸く本科生としてその緒についたばかりで、勤労働員、軍隊として慌しい変転、その間にあの忌まわしい戦火は私達から母校を奪ってしまった。今、生きながらえこの地に立って、あまりにも過酷な運命を恨んでも恨みきれなかった、明日から何処を抛り所に学ばばいい

のか……。この日集まった同期生の誰もが同じ思いだったに違いない。焼跡の片隅には夥しい数の油脂焼夷弾の、焼けただれた六角筒が山積みされていた。畜生。これが魔火の正体か。この日、大部分の同期生が顔を揃え、恩師共々に無事再会を喜び合った。私に握手してくださった栗原先生のお目には涙がにじんでおられたのを今でも忘れずにいる

「久しぶりに昇る竜城が丘の坂道、その木蔭に見えるはずの学び舎はそこにはなかった。“母校焼失”この現実を目の当たりにして、暗然として一瞬、声を失った」平林は、それを見て愕然とし、その場に立ちつくしてしまったのだろう。「教師への道を志し、日夜勉学に励ん」だ学び舎はもうそこにはなく、「あの忌まわしい戦火は私達から母校を奪ってしまった」のである。しかしながらそこには感動の再会が待っていた。「大部分の同期生が顔を揃え、恩師共々に無事再会を喜び合った。私に握手してくださった栗原先生のお目には涙がにじんでおられたのを今でも忘れずにいる」という平林にとっては、先の見えない今後にかすかな光が差し込むことになったのかもしれない。残された者として感じる「生きる」ということの重みを感じながら、歩んでいったのであろうか。また当時予科1年生として入学した原田清務も空襲の衝撃について、次のように語っている¹⁸⁾。

私たちは、終戦の年、昭和二十年四月に愛知県第二師範学校予科に入学しました。戦争末期であり、先輩たちは全員軍隊や軍需工場等に動員されていて、学校にいたのは私たち八十名であり、全員が寮に入っている生活でした。最初の二週間は一部の先輩による寮生活の指導を受け、師範学校というものがどういうものを学びました(中略)米軍の飛行機による都市爆撃は次

第に激しくなり、警戒警報、空襲警報が頻りに発令され、すぐ近くの甲山のサイレンが大きな音で鳴り響き、夜中に起こされることが多くなりました。そして七月二十日未明、岡崎の市街地はB29による焼夷弾爆撃を受け、一夜にしてそのほとんどを焼失しました。私たちの住む師範学校も例外ではありませんでした。たくさんの二階建木造校舎は、あっという間に火の海となり。私たちの必死の消火活動にもかかわらず、一部を残して灰燼に帰しました。その衝撃は今も忘れません。焼け跡の片付け作業を続けるうち、八月十五日の敗戦の日を迎えました

入学してまもない原田は「最初の二週間は一部の先輩による寮生活の指導を受け、師範学校というものがどういうものを学びました」とあるように、やっと学校生活に慣れてきていたところに空襲が起こった。「たくさんの二階建木造校舎は、あっという間に火の海となり。私たちの必死の消火活動にもかかわらず、一部を残して灰燼に帰しました。その衝撃は今も忘れません。焼け跡の片付け作業を続けるうち、八月十五日の敗戦の日を迎えました」とあるように、敗戦と母校焼失という二重の衝撃を受け、複雑な思いを胸に終戦をむかえた学生も存在した。師範学生らはそれぞれに空襲の痛手を受け、将来の夢を失いかけていた。それでも彼等は必死に生きる活路をはいつくばり、立ち上がりながら見いだそうとした。

②終戦後の師範学生

戦後の愛知第二師範学校は残された教員・学生等と共に復興にむけて立ち上がろうとしていた。母校の焼失という事態のため、仮校舎での授業再開を願いつつその場所の確保に追われた。いくつか候補地があがったが、終戦後約20日で最終的に豊川市に当時あった「海軍工廠男子第八工員寄宿舎」を選定す

ることひとまず落ち着いた。当時の様子について小栗辰夫（昭和23年卒）は「小生たち寮生は、先発隊として寮の整備のため、今まで行ったこともない知らない土地、豊川へとトラックに乗り出発した（中略）我々の宿舎は、四れつに並んだ宿舎の群れの一番北側の四棟が寮として与えられた。一步足を踏み入れると、中は紙くずが散乱し、こわれたふすま、硝子の無い戸、散乱した無数の硝子の破片と。みるも無惨な状態であった」とあるように、戦争の爪痕を残した寮で非衛生的な状況のもと生活を開始しようとしていることがうかがえる¹⁹⁾。また天野仁は「豊川の薫風寮での思い出は食事のことばかり。食堂での主食といえば来る日も来る日もサツマイモばかりだった。それも朝昼版の三食共ふかしたやつばかり。背に腹は代えられないから食べていた。それでも空腹時にはうまく感じたものだった」と述べているように、「サツマイモ」が主食であり、食糧難のため「来る日も来る日も」食べ続けていたのであろう²⁰⁾。みな生きることに必死であった。

【おわりに】

学生のシンボル「葵」に込められた学生の思い—三河男児としての師範学生

岡崎空襲で被害を受けた岡崎師範学校・愛知第二師範学校の校舎は大部分が焼失した。またそれに伴い、創設の地岡崎を離れ、豊川での仮校舎における授業開始、また1949（昭和24）年には「愛知第一師範学校」・「愛知第二師範学校」・「愛知青年師範学校」が吸収合併して新制「愛知学芸大学」創設の動きが起こってきていた。また新たな学制改革のなかで、男女共学・民主主義教育が次第に行われるような事情になってきていた。そのような激変する生活環境のなかでも、師範学生らが拠り所にしてきたものは—「校歌」であった。戦後予科に入学した平尾準次は、「校歌」について次のように述べている²¹⁾。

「葵の花の咲きそめて」

師範学校時代を振り返る時、もう一つなつかしい大切な思い出として迫ってくるものに『岡崎師範学校校歌』がある（中略）年を重ねるごとに、このなつかしさが広がっていくような気がしている。今もごく自然によく口ずさんでいる。これを歌っているとなつかしい、ちょっぴりほろ苦いような若き日の思い出、寮生活から豊川での生活まで、予科時代の思い出のかたまりにぶつかる。なつかしい思い出としてばかりではなく、音楽としてもよい歌である（中略）また歌詞がいい。「葵の花の咲きそめて」で始まる歌詞はあの激動とも言える時を共にがんばった学友を思い出させてくれる。そして、教育への使命に燃え、優れた道を拓いていってくださった先輩の心意気・師範気質といったものを感じさせてくれるのである。この校歌に象徴される師範学校の校風・伝統といったものが、若き日の多感な心をつつんでくれ、校歌はわが音楽のふるさとであったと今はそう思い込んでいる

「『葵の花の咲きそめて』で始まる歌詞はあの激動とも言える時を共にがんばった学友を思い出させてくれる。そして、教育への使命に燃え、優れた道を拓いていってくださった先輩の心意気・師範気質といったものを感じさせてくれる」と平尾は、校歌と出会い、校歌を知り、歌ったことが多感な時代のころをなつかしく思い、心の支えとなっていたのであろう。そして「歌詞」にある「葵」は、古く先輩からの伝統として「三河男児の歌」が詩吟で演じられたりしていることから、力強い男子であってほしいとする意味が込められていたものと思われる。

岡崎師範学校・愛知県第二師範学校の男子学生らは校歌の歌詞にある「葵」をシンボルとする帰属意識をもっていった。また「三河男子」として力強く立派な男子になることを期待されていた。

【註】

- 1) 拙論(2007) 広島女子高等師範学校と女子学生文化の胎動、広島大学文書館編、広島大学文書館紀要第9号：1-20、同(2008) 三原女子師範学校と女子学生の帰属意識の形成、第10号：25-40
- 2) 女性雑誌の読者である女子学生の心性史の分析を試みたものには、本田和子(1990) 女学生の系譜－彩色される明治－、青土社や川村邦光(1993) オトメの祈り－近代女性イメージの誕生－、紀伊國屋書店がある。また少女雑誌における読者の特徴を研究したものには、今田絵里香(2007) 「少女」の社会史、劉草書房、渡部周子(2007) <少女>像の誕生－近代日本における「少女」規範の形成、新泉社等がある。
- 3) 昭和二十年予科入学生の会編(2000) 激動時代の学生生活を語る、非売品：巻頭頁
- 4) 同上、巻頭頁
- 5) 前掲(1982) 愛知教育大学史：26～27
- 6) 同上、46頁
- 7) 同上、35頁
- 8) 同上、742～743頁
- 9) 同上、768頁
- 10) 同上、775～776頁
- 11) 志賀重昂は、岡崎市出身の世界的な地理学者であり、明治時代の洋の東西を問わず旅行をし、その見聞したものを著書にしている(『志賀重昂全集全8巻』) また文化的交流の先駆的役割も果たした。木曾川の「日本ライン」の名付け親としても知られる。
「三河男児の歌碑」は現在、岡崎東公園内に存在する。(前掲、母校の歴史と同窓会百年－三河教育の潮流－、155頁)
- 12) 同上、199頁
- 13) 同上、198頁
- 14) 同上、200頁。安藤春雄は反戦ビラ事件で同校を退学後、1932年に名古屋新聞に入社し、中日新聞東京総局編集部次長、社会部長、中部日本放送東京支社長などを歴任した人物であった。1970年没。岡崎師範学校においては、安藤のように将来を見据えて積極的に活動に取り組んだ社会運動について肯定的に受け入れることは難しかった。
- 15) 同上、279頁
- 16) 同上、286頁
- 17) 同上、305頁
- 18) 前掲、激動時代の学生生活を語る：巻頭言
- 19) 同上、311頁
- 20) 同上
- 21) 同上、118頁

※本稿は2008年5月25日(日)に開催された「全国地方教育史学第31回大会」(於常磐大学)において発表したものに加筆修正したものである。